

「徒然草」は二四三段から成る随筆集です。鎌倉時代に兼好法師によって書かれました。人生や世の中のことなど多方面にわたって、自由な立場で感想や意見、批評が述べられています。

## 読んでみよう

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなるものありけるが、土大根を万にいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひける事、年久しくなりぬ。或時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来たりて囲み攻めけるに、館のうちに兵二人出でて来て、命を惜しまず戦ひて皆追ひかへしてけり。いと不思議に覚えて、「日ごろここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らにさぶらふ」といひて失せにけり。

深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

## 《口語訳》

九州の筑紫に、盗賊を逮捕する押領使という者がいたが、大根を全てによく効く薬であると考え、毎朝二切れずつ焼いて食べるのが、長年の習慣になっていた。ある時、屋敷の中に誰もいないすきをねらって、敵が襲ってきて屋敷を囲んで攻めてきたときに、屋敷の中から武士が二人出てきて、命を惜しまず戦って、敵を全て追い返した。押領使はとても不思議に思っ「日頃ここにいらつしやると思えない人々がこのように戦っていたのはどんな方なのでしょうか」と聞いたところ、「長年頼りにして、毎朝食べていただいた大根たちでございます。」と言って消えてしまった。深く信じていたからこそ、このような御利益もあったのだろう。

読めたら  
色をぬろう！



《読んだ回数》



朗読

暗唱

古典の随筆作品からは、遠い時代に生きた人々の生活を知ることができます。また、当時の人たちの考え方や、感じ方を知ることができます。現代の私たちが読んでも新鮮な発見があり、共感できる部分があります。短編小説を読む感覚で、ぜひ読んでみましょう。



### ★知っておきたい古典の知識

筆者の体験や、見たり聞いたりしたことを基に、そこから感じ取ったことを自由な形式で書いた文章を随筆ずいひつといっています。

古典作品の中で三大随筆さんだいずいひつといわれる作品は次の三つです。

平安時代・・・「枕草子」	清少納言
鎌倉時代・・・「方丈記」	鴨長明
「徒然草」	兼好法師



古典の文章には、現代文とは異なる仮名遣いや言葉のきまりがあります。主語が省略されていることも多くあります。繰り返し音読して情景を想像しながら、読み味わいましょう。

### 読んでみよう

#### 《「枕の草子」冒頭文》

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

#### 《「方丈記」冒頭文》

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖すみと、またかくのごとし。

#### 《「徒然草」冒頭文》

つれづれなるままに、日暮らし、硯すずりにむかひて心こにうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。